南嶺子

049.1
Ta131n

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n

ガラス使用

國立國會圖書館藏書

柏

本清

南嶺子叙

岩久

徽霖纔霽。祝融司令。高丹餘冥。
于牙窗之下。南嶺子保訪省。譚餘
見示其所著冊子。云果隨閱見輒
筆之。湯錄群哉。筆資譜柄者。
每慮數十冊。最之曰南嶺子。

國立國會圖書館藏書

愛蓮黌藏

國立國會圖書館
24.9.5
圖書館
25499

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

予將筆藝之。曰乃學不修。
修則當修有用之學矣。
古先聖王之經國甄陶。固由去風習
尋法。從順流行舟。夷塗推車。而
吏馳高遠論古理。何益焉。蓋謂吾
東方。以掌故者流。建旌幟者類。謂

本邦自有其典故。詎必求異域。其
澂竿鹵莽。固不誤論。南嶺子名光樹
字公奕號秋齋。南嶺亦分號。嘗以角
田為氏。蓋其系出自源氏。角田滿仲之
遠裔也。其為人也。襟字浩達。不硜硜
瑣事。不逐逐時俗。而不知者以為矜誕

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

姑妄知其以為希世宏器。其學博綜
強記。又有獨得之見。專研究故典。兼
闡明神史之經秘。故獨虎視當世。名
聲籍甚。講道 輦轂之下者有年。
時或翺翔于東都尾簿之間。以其道
謁于千乘之君者。亦不為少。而其所著

其業若干卷。炳焉若觀火。率以中
夏歷代之沿革。參互會通。遂歸是
正。後還 京。仕于 竹園懿親王家
更襲桂氏。此善有所本。拓云。兄屬序
予。翁以不文。而不許。因陳其梗槩。以
為弁言

寛延壬巳歳六月南海陶冕謹撰

南嶺子序

桂子所著南嶺子三卷至解世愚々惑其語訛而言之確使讀者至不自厭駭々而稱愚者豈非和桂子嘗師著々書數十部來嘗建稿撰筆記來

義系接于桂子本姓角田云先
身攝之角田源氏出云其為人
豪放而不敢小苦博學兼記事
尤熟　吾邦之典古以正名為
學皆因國史及日本出而證焉
好論神書三流發明者多不

与巫祝談怪禄儒說理附会以
誣芒之法伍揭宋一家以發焉
從而學者往往而有不喜者稱其
學又有放人於是卒毀參諱
乾象自傾書於京師二十年如
一日初桂子遊東武又如匡城

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

諸侯大夫要義者亦多々亦培
置于魯河時已皤々今也且經
年於此者未桂子去養不
去者毀毀譽亦不載桂子亦
光樹李以實有頭三分雖也
未就可請序於余序以賜

寶延己巳上元後生
讀岐　良芸之作耕撰

25499

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

南嶺子　引用書目

周禮　禮記　詩經　書經
爾雅　春秋左氏傳　呂氏春秋　國語
孔子家語　淮南子　文選　漢書
韓文　列仙傳　閩書　論語大全
群書治要　輟畊錄　字彙　事物紀原
蓼溪筆談　武備志　登壇必究　經國大典
東醫宝鑑　吳子　唐書　孫子
法華經　萬行首楞嚴經　佛本行經　傳燈錄
宋高僧傳　續高僧傳　釋氏要覽　南海寄歸傳
日本書紀　續日本紀　續日本後紀　佛祖統紀
日本紀略　三代實錄

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n　ガラス使用

古語拾遺　令義解　令集解　延喜式　貞觀儀式
北山鈔　文德實錄　雜律　江家次第　朝野群載
類聚雜要　類聚三代格　倭名類聚鈔　本朝文粹　釋日本紀
拾芥鈔　東鑑　玉塵鈔　梁塵愚按鈔　玉海
野府記　二水記　太平記　庭訓往來　新申樂記
明衡往來　方丈記　源氏物語　神皇正統紀　徒然草
きゑドアの記　萬葉和歌集　古今和歌集　新古今集　伊勢物語
平家物語　太閤記　禁祕鈔　明月記　枕草紙
宇治拾遺物語長秋記　園大曆　大和物語　園槐鈔
百練鈔　類聚國史　神社啓蒙

右引書通計凡九十七部

南嶺子　目次

一　湖船風波ノ論　二　七福神ノ話
三　漢耽儒者ノ論　四　三年ノ喪義
五　漢風ヲ好異人說　六　文字ヲ知テ語己話
七　觀音ノ歌ノ義　八　儒佛賢愚ヲ分論
九　梵語ノ義　十　天竺牛糞ヲ崇ム說
十一　巫覡ノ義　十二　儒佛ノ徒神事ニ戻義
十三　天皇氏地皇氏ノ義　十四　神代人代ノ論
十五　博奕古ヨリノ禁　十六　神國ト云フノ義
十七　藪ニ香物ノ諺　十八　兼好長明ノ論
十九　不定日ノ義　二十　人相ノ論
廿一　聖德王ノ考　廿二　古代遊女ノ義

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

廿三 傀儡ノ説
廿四 坂口羽ノ教示
廿五 永楽錢ノ事
廿六 僧ノ髯アルハ非法ノ義
廿七 古ノ婚禮ノ義
廿八 未嫁女不結髪事
廿九 牛ニ鼠ヲ捕サントスル論
三十 善人ニ親ムベキ事
卅一 佞奸忠良ニ似タル義
卅二 朱ヲ奪フノ紫ハ今ノ紫トハ別ナル考
卅三 方語郷談ノ事
卅四 言語ノチマルトナマラザル論
卅五 古ニ云百姓ハ百官ノ義
卅六 庸醫誤人義 并 六尺ノ字
卅七 藥ノ精論ヲナス話
卅八 感状ハ佐々木ニ殆ト云誤ヲ解
卅九 古今和歌集序詞ノ事
四十 庭訓往来ノ考
四十一 直物袋漢土ノ證文 并 牡丹花老人ノ事
四十二 忌鉄藥ノ論
四十三 空理学ノ事
四十四 獅子舞ハ唐ノ太平楽ト云考
四十五 一勇ハ才タラザルノ答 并 清盛ノ正成朝臣ノ事
四十六 正成朝臣湊川ノ義
四十七 六月祓火剋金ノ説
四十八 平魚ヲ賀祝ニ用ル事
四十九 祢宜ノ字義
五十 神前湯立ノ事
五十一 神事ノ舞女ヲ市ト云義
五十二 古ハ官人裘ヲ着セシ事
五十三 鳥井考
五十四 嫡子長子ノ分
五十五 二合字事
五十六 猿楽段ヲ取事
五十七 真野氏撰書ノ事
五十八 外宮文庫ノ事
五十九 桃花ノ事
六十 蕎麦ヲ解事
六十一 子タバノ字
六十二 極楽ノ字
六十三 足桙ト云名ノ起リ
六十四 柿本人麿ノ事
六十五 猿楽ノ伎目
六十六 猿楽古今ノ異
六十七 高砂ノ謡曲
六十八 忠臣良臣
六十九 冨士ノ三尊

国立国会図書館 タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用

七十 閻魔印
七十一 理学ノ惑
七十二 盲人紫服
七十三 遊女クマノガ事
七十四 海字ノヨミノ事
七十五 主水掃部ノ事
七十六 蛇猫ノ争
七十七 鰐口ノ事
七十八 痘瘡ノ鬼妖
七十九 物皆相畏レアル事
八十 古代米價
八十一 天照大神ヲ民家ニ祭論
八十二 安岡氏家妖
八十三 野狐ヲ祀ル論
八十四 神道者異名ノ事
八十五 佛書ハ呉音ニヨムト云ノ誤ヲ辨ズ
八十六 孔子見南子ノ義
八十七 契仲ヲ論ズ
八十八 三十三間堂棟梁ノ事
八十九 極楽地獄ノ義
九十 神社ニナレシタ公ヲ論ズ

南嶺子四巻九十條

南嶺子
多田氏号
秋齋名義
俊一号南
嶺子壺井
鶴翁門人
浪華人以
国学鳴

南嶺子巻之一

秋齋桂先生著　門人　松尾守義　山中秀蕃　同校

○少かりし時東近江にゆくとて大津なる石場にうつる。船場出ばくして只一艘いま出るといふなるやがて便船にうつる。琵琶なる江にて浪のおとしの西湖まぐ見ひつぐるおもしろ。俗語として空の年色変り。比叡おろしに舷をふきさまたごうりつる湖の逆流つよくして船今もせん方つきしかや各見悟しめへといふめぞ。遠をこの案人あるやとさいぐ中に空やおもしろにはたとおもしろ。船のせがいにて見れば。烏帽子浄衣に大袴ねかけしやいづれの社人ぬりありけんいでく神力を以て此国を恵めてたる。桐はいかしく高天原に神ぞ御りまほと。後をくりかけしに科戸の

風の吹ちらふことぞさへなるに根國底國に氣吹放出て佐須良比失てん
とよむに隨て風を清むくつよくなり人皆さまたひしなれなるを
なるを輪袈裟かけし老僧いやくつが仏陀の冥感にあらざんぞいかでか此
船中を救ちんと光明を云くれども吹ゆるにおどろく人くを咍く
舳に立るいびきせし山伏むくくとおきあがりまでに文覚上人を船中の難を
たすきんとて龍王めくといふれし例もありつゝき役優婆塞のなれとみ
野にふし山に姫せし渡りその験を見よやとていちうの珠数をもこしに
どつとおしむ大浪さらけを浸をぞ山伏もしり居に清らびね船人殺をそ
いかる験者ちにもやと無量に見合せし悔しきよいでわきてが行清ゆめに
かけしさんと高帳を斥帳にゆりまし おもかぢをとりかぢ にはしまをさぞ仏の

るもなく船を片田につきて人をかしき夜拾ひちなりぬれば船の
上のすは祢宜出家山伏の祈りも船人のしるすぎたるに清さぬり是に
つけても名き病人の業をすゞめて香水に腹中を換じ古の名醫陰
陽をすらち論に論をかさねてくらし方業をさしおき神勅夢想の妙業
を伝ぞる徒に愚なりとやいふべき神より仏より業の事は功あり医者と
勝れたるべし いつぞや道成ちといふ猿楽を観たるに猿の落ちる所に住僧
出て云くが目法の行法もうやうの時のあなり一いのりしてもとの猿樓へ
あぎんとあるに いのりの力にくあぐるすしく吹て居るに ひけやあくに
ふまの陀羅尼とあり此寵物の化者をいかなるをきにやひけやあくとは
もつらものすゝ所り

○世に七福神のうけおといふあり。漢土の布袋。日本の蛭兒。天竺の吉祥天女。おほさびもらさねとりこゝ格々。貪慾者流の物好なるべし。是も是貨舗に出て煤はづきに成り。紙表具やふれ軸もたゞれ。取身の餝さへ人をたのみぬぞ出来がたくしていかでか人に福を與ふべきや。壽の学書ゝ盃を持。鶴亀松竹の鴻臺に向ひ。千秋万歳の小鶴に祝せられながらも。俗に病家おこりて。おへなれ家の露き四つ筈にて生れたる身。七五三縄にしまりて神の者なりとて生毎しあもなるほど。おてが仏法の售やすき眼的にて賢も愚ぬるもおもしろく場なれぞこそ。伊勢西宮の地にも諸宗の寺院立ほら所り諸義祝法の信者にて皆神境の人なりよしとやいはんあしきとやいはん。只是國の風俗となりより

○儒者より家國の神道を難じ。もとより道なき國なるべく誹謗類多し。神代書に伊弉諾尊伊弉再尊此鶺鴒の尾を搖ひを看て。これにならひて。交道を得ぬひぬとあるを。詩經に鶺鴒在原宜于兄弟とあるを以ゆゑものにて。兄弟夫婦なれぞこそ。妹兄といふなるものゝ。日本書紀雄略天皇巻に称妻爲妹蓋古之俗乎とものせたり。用明推古のころまでも。鹿妹を后としぬふなどアつの家あり○稗海といふ書に。世に侍女媧は伏羲の妹なりゝ而して夫婦となる。是より生民滋息すとのせ。舜は堯の女娥皇女英二人を妻とし婦と妹をかしべて娶るゆゑ。今を以論ぜば聖人とも君子ともいふべからず。是時の稚らしむる所にして禮を製せざるむかしと。製せしより後の若輩を

此中華中国の論定的常にしり近来廿年おもと大儒と称せらるゝ者も知ありて西土と中国中華と書こゝを居常時にかゝる此論あり

ことゝ論へざるが故なり。今の儒者はづかぬ書をよみ。いまだ物礼をも弁ぜして譯文の修行ぞ。左氏傳の舎ぞと。器物より始て行ふもそろあしの物を考へし。家国は生きながら。家国を夷狄と云ふ。吳國を中華といひ。華者華物などいふを。家本邦に對しての罪人所ゝべし。漢去れ教授國号かなりて唐といひ。宋といひ。明といひ。清といふ。通号さへ立がたれ国なれば。漢以来年号を建て。今の清に至るまでこゝあるゝ所く。此年号を受る諸国よりハいかも中華といふべし。夷狄の国年号別にわかる所く。安南国に至るべく年号を建しがもつぐかざりき。ゆゑ大日本國を文武天皇の大寶といふ年号より。今寛延まで断るゝ所し。年号連續の国にてこゝ大日本と清と海国のこと。明とこん清としんとよむ人もあり是たゞ呉音を用ぎ得ず　然れば

清の王とこれ何ぞ中華の天子と称せん。大日本に天子なしく。年号あり。家國をいふ中華のこと

〇禮記 曲礼上ニ 曰。入竟而問禁。入國而問俗と云く。然るに今の儒者神祇を譏る禮記をもてゝ家をまもるにあらず。曲禮下に君子行禮不求變俗。祭祀之禮。居喪之服。哭泣之位。皆如其國之故。謹脩其法而審行之。とこそあるに。いづ国の祭法にたちたゞ。國風の服をもて三年つとめ。神主を造るに周代の尺を用ゆ。ゆゑ国風に戻れるのこと云ふべし。禮記に背りを。儒者とやいふべきおぼつかなし

〇或家中に三十口の扶持を賜りし儒者あり。行ふも孔子の通りにせされば儒者にあらずと云ふ。沽酒沽脯食ならずとて酒もまゝ方にて

醸し鰐苔もまへまてゐさせ。周人にて諸物をさしらへるを取る
の人実見しるをいかに漢器をこの流れだとて。内々にて承れば。大小
とも真々諸刃の劍のよし。日本の汲術の流にくもそのつひ方は色。
また度儒を以つかへらるゝといへば。武門のをしなるべきや。その上文武周孔の
時代が周なれどとて。一切のものを周の製にてまゐさんとせられても。官途品級
の次第。職掌のていてそ。周禮にて然とも考らるべし。もゐさしにても太古の
事なれば。今の用に充ていハ考へたらざる事の三所ゐべし。その方を日本の
製にくまゐさるゝなるべきにちくらもの。頭に入ゐひなんといふ事。彼
儒者を此以下を示せ。周の代のものを考ゆられざきば漢の代の
製を用ゐ事。さしつかゆる事更に所しと云ふ。歌舞の人今はそ取りかね。

智を非を凌ぐに足ゐるとハ凌ぐにもあらぬのものなるべし。それ五穀を量
升。周の製を考へし。漢の升を考ふに日本の一合を一升とし漢書に
牛一疋に三十六斛を駕すとしるべしも。日本の二石六斗にあたれば
ゐる三十人扶持なる事。一ヶ月に四石五斗づゝ取ることせ。一年につまりての
高五十四石なれば。何るも周製漢製にくまゐさるゝがなりしが扶持方
も漢の升目を以つかゆる。一人扶持五合。是を二十合て一斗五升。一ヶ月
三十日に四石五斗。十二ヶ月の内大小のちがひまでしハあれば。おのおのて五十
四石を。漢の法にてまゐさせば。日本の五石四斗にあたれり。尚月より四石
五斗の所へ四斗五升づゝ取ることに相なるべし。また度まゐ扶持
米まぐ漢流にくまゐさるゝ所ばかり大変なるべしといへば。儒者信天して

家内十一人一ヶ月に四斗五升あくそ飯米も是なし。全ぶあやまり
入しとすびとして漢流をやめしと所りぴが勝手になりぬるはそのまゝ日本
古格に法りせ。損のゆゑるすだり異國の風をまね國の俗に戻るまゝ
早竟いさゝの学問に至のぶされたる程客といふ程し。扨漢の外をおもむ
樊噲が斗酒をうふけしも日本にくの一升めつしきるまゝあらば。呉邦も
升次第に大になり今ハ日本の五合にあたる程を一升とは。萬事是を
以家日本の大なる事を察すべし

○文字を用を連ぶるとにて。思ふるを書のこしぴこまていひやりがたき
事をしてゝめやうと。遠方の文までにて事さへ情あるだ。外に穿まちるに
おまぎさるものなり。久しくあやまり来りし文字を今出改ていふ俗に通ぶ。通

ぜざれば。文字の益なし。さらに或学者はんつまて脾胃よろしく。しかも合
ぶのことをしらるが。一時醫者のもとへ丈して。今日鮭をもらひたるがたべてもくる
しからぶやと申おつりし返るまに。何かハくるしからぶき。功能よきものにはあれば。
やがてしてめさせて。してくるにたべしかば。想身問熱し四肢しさりにゆること。
くるしむるまゝりなる所へ彼醫者あつりうりしを。家内の人によひ入毒魚と
時て見とまさにたべられざりしに。あまり見るまゝるを賜りし人あるあらはして味噌
にて煮させながら先刻手紙にて召られしに。くるしからぶのゆ返るまゝ
多くたべられあの通りの苦しことといふ。醫者眉に皺よせ。鮭をみそ汁とし
がてんせぶと。獨を見るまゝに河豚汁なり。是ハいかにとおとろくを。亭主くる
しき息の下よりもぞれ鮭を河豚の一名俗語く是をサケとよむ。サケハ

正字鮭にして状鯨に似て円肥。其子有二胞。胞中數十粒呼曰鮞。宮
おぢ鯨にをぜしを正字にて出し鮭のるゐ所り。文字をしらぬ醫者にあや
まられて。思ひよらざる死をいたしたりしげにいへど。文字ハ私ちがへてもそこが
仕覚の業とて。青砥の粉を水にうさ立てくのすせけきだ。さちはら河豚
の毒を解して別条をなりしとかや。いられざる文字知自慢にて命を長てん
とやしてる物ぞき。俗字にたれくれ第を覚へざる家業にうとき。いづまを
非といふんや。池洲の魚屋へ鮎をとて出付やりしかど。あ日をさしこしてるに。
物と文盲なる魚賣ゆ。あ日を正字鯀にして。鮎ハなまぐとよみ。夷魚と
同じ。源順の和名抄に鮎をあ日のるゐとせられしをかれ見あやまりしと笑ひ
し人あり。魚屋をとらへての正字ぜんさくハ皆非ざる人の非なり。昨日の昨の

字に作る清の作の字を書たりとて。どがわらるてるハないといふ程にまへ取くだ。
無用のなる程よく事たりぬべし。

○たゞその先志めぢが原のさしも草。家世中にあらんかぎりハ。親世者此分と
ア傳ふ。此分ひいきなる人の説にハ。志めぢが原此さしもぐさといふ十二字に一切
成生といふてすゝ出りとそ。然れたそれを親者だり合点にて。世ゆへ無ぞね。源
語なれど。成生に對して更に益なし。さゞ分のおもてをやしらかに見る時ハ。志め
ぢが原のさしも草。何の縁も明くことだつぎ出なりぬ。さしもぐさ。さしもしらじな
もゆるおもひとよみやとハ各別にして。是が孫親者の分に極たる親ハ分におゐ
て下手ことぶべし。病字未瘥の親なるとうけし人へ灸をやすの志めし
なりや一知をべし。思ひぐ仏菩薩の分といふ物多くあり其時の住持の僧

下ぶなれば。その本尊も下ぶにて。信持の信が上ぶなれば。本尊も上ぶにて
まし給ふる。疑ふべし。又外の人等中に感得せし。分。分よりこれは分をあらへ
ぬべども。一向分よりこれ人をいふべきなり。信仰してもよく分を感得せし例なし。ぞまく
等中に志ありしかふといふ分も。本に行をつぐ順ぬてはなく。糊をうちあて礎とせんと
するがごとく。仏菩薩はうつる人によりて上ぶにもあれば。さしも第の分を新古今
集にのせられて。是清水の観世音の法分となんとあり。五文字は從ふのめとぞ
ゆへし。法分と明んの明んの字ゆへ。ゆへより

○儒学を日く智を磨くを称となり。古聖の語なり。歴史諸子百家
の書を渉獵する故。古今の変に達し。物に惑ひ。事理に明になる道理
なり。仏者を日く智をくらし。信実を仏陀に満ひ。自力を捨て他力

をたのみ。息ひきとるといふや弥陀にもせよ釈迦にもせよ。光明のうちへ摂取
せらるといふが眼的なく。少も疑ひなきを満ふの信者なれば。いさしも智
をもてしらしてハ此場にいたりがたし。智をもてしらさぬ。で一念に南無阿弥陀とか。
南無妙法蓮華経とか。とあへさへすれば。寂光浄土にいたると信ずる。法ハ今日より
明るを悪に明るよりハ明後日ハ程おろかに。少も智を動とぞ疑ひをすぐされば
仏者も博識になる也。先達の説を守るだけにて。名ハ成ぬ。疑をなし
て疑ひを散ぬ。ぞを以方便説の言をくると隨落するとが一時のなり。
これ仏法を識らぬ。智を明にする分につかんや。才をくらしまして方に陥もんや。
人をれおきをわきまへべし

○唐の義浄三蔵天竺にまゐり。五天竺を巡りしに處々に池をあり。是を

廣袤の事を栽功徳池とするを彼國天地の正を得ず。大熱国なる故。呉
日往来の人熱を生ずるなり。浴させて其くるしきを救んなるなり。唐
まで處々に池を造るを功徳とするハ此益のるすなり。天竺熱国なるなりく
あれど南海寄帰傳のせり。天竺のるすを漢土にうつれば遥の事なり。漢土
のるすを家大日本にうつれば甚ちがしぞれよさへはちがへて杜若をかきつばたと訓
じ欲みをやまぶきとおもふ類あけてかぞへがたし。梵語を漢語に譯するなり。
唐こなの舊譯をもとよりの例。唐こなの新譯をもとよりし。漢土六文字
を體にし。天竺は青を躰にし。日本亦音を本にしく。漢字にしてよりも。
花此曰波奈。月此曰都幾。梵語を漢語に譯するなり。是と裏表にて。阿迦
此曰水。摩迦此曰大の類なり。もとより日本の語ハ天竺とひとつなるなり。

多し。和へ和の入るをアカと云。皿をサラ。瓦をカハラ。猿を云ふも一シラとも
よむがごとく。日本の語と入まぜてもやはらかして耳に云ふ。然れど日本に
才量にぐれたる傍ありて。漢土にうつしたるを清ちうつしにせし。日本の語を以
天竺の語を重譯にしてこそ誤にくなるべしむかしより其人なき事をいふ。
○天竺は牛の糞を爲むほなれど人情殊異なるを推知るべし。南海
寄帰傳にハ乾ける牛糞を地に揩清淨なりとして其上に人をして卧
息しむとのせ。三才圖繪にハ南尼瓦羅國（天竺地ノ内也）に牛糞をもて壁に
ぬり。或は是を炮くるを楽しむ也。尼へたり。密宗に牛糞壇とて牛の
糞を壇にぬりて法をするなり。いかに境域殊なれどとて。沉穢を重
ずる人よりはたくもそがてんのゆかねるなり。或能化とよぶるに傍にあるべしとぞ。

胡粉をぬるすゝかく音を假て出ちかんとさも有ねばしと思ひしまを日
思ひけれども。佛本行經第十四巻を見るに。一牛王ありて說ち偈あり。其
偈に曰。世人皆取我之糞。持用塗地爲清淨。下略　萬行首楞嚴經第
七にも雪山の白牛ハ清さぬゆへ。その糞を栴檀香等に合し泥として
場地に塗とあり。又南海寄帰傳に。病ある者を徒糞猫糞を雜湯
と号してのむ。美名を加るといへた。稼惡新極とのせりがらはまて。天
地の愛を乞けず常にはぎに袈裟けくらし往の。至後の蠻戎に生
れし釋迦もいかなる才徳の人にて有しや。其教よく風俗を壞れに切あり
但し牛糞を用ひ。猫糞をのむ國風常となる故。禮のをなもれるを
害とる事なきにもあらず。古今の翻譯人凡一百八十七人皆誤あるに。

羅什のこ誤のもくなきハ胡國に産れし人ゆへといへど。天竺を上國といふ
事。仏ひいきかるて地理にうとく還て笑をとるの事なるべし

十一

○大日本國を天照大神よりしらす。千皇不易の神國なるゆへ今更あら
ためくいふにはよれども。神代前皇の道あり。君臣其位を易さらず
萬々世民無能名不測之道なるゆへ。是を神道といふ。史記ノ蓋法ニヨルノ文日本
書紀孝德天皇巻に輕神道の字あり。續日本紀三十七桓武天皇延
暦元年七月の文に。神道難誣と書れたり。國史といへた多くハ此文字
なきハ唯家大日本の大道にして。別に号を設ずさ拙なれども所り。仏
法儒教を天竺漢土の教にして。家大日本の主教にあらざれどいふにも
仏の字儒の字を蒙らしむ。是理にて。神道常にハ只大道とのこといふ

ばきよ。近年祈禱を業とし勅補の祢宜神主にもあらずして市中
又ハ村邑に住し。神道者と名のりけて。人を誣る属。男なれば是を覡
といひ。女なれば是を巫といふ。覡も巫も人を誣詐の号なりされば源
順の倭名類聚鈔巻之二。人倫部に乞盗類と訓ふとして。巫覡（巫和名加牟奈岐。）
（覡和名乎加牟奈岐）遊女。乞兒。偷盗。群盗。海賊囚人と列ならぶも。巫覡を第一におか
れたれば。其比までハよくしあしきものに立ちたるべきなり。予巫覡とあしくいふに
ハあらず。古書のおもてたのごとし。巫覡は祝を能く恨ぜ呪を恨ばし。予は
唯順の祝に従ふのみ。○續日本後紀第十五。承和十二年七月丈夫。中
務少録正五位下巫部宿祢以下五人。神饒速日命の裔なるに予細
ありて桓武天皇ありて。巫祝といふ姓を賜り。伊とやらん巫覡の子孫の

指にて。迷惑なることを弱ひしなり。當世の宿祢と改称しるべきなり
古より巫覡といやしむるなかくの如し。官幣に頒ず大社小社の神人ハ。
其社のものにつけ置るものなれば。庶民の祈禱に頒ず。故に是ハ別
儀なりといへた。市中の巫覡に給ひけざとなれば罷役をなすべし。禮王制に
曰。假於鬼神時日卜筮以疑衆殺云て又一種神道者といふものあり。
神代巻中臣祓などを説て門徒をあらしへ是ハ流れとなりて全胎
なれば今ハ祝なれば神道あり。なれば今ハ仏神のなれば祝なり。
べくらなれば神道あり。なれば神道唯一篇なりと云ふし唯一
神道あり。天と人と唯一とかつ唯一神道あり。深秘の大事ハ唯授一人と
立ち唯一神道あり。護摩をとき加持として。宮上霊寶神道加持

と云ふ事も神道にあり。宋儒敬の一字を眼的にしたるとおもふ。土金
の侍といふすを新に巧出し敬の字へ約せり神道もあり。伊勢をはじ
め諸国の大社。その祭祀の法をその職なるゆへ侍り知れた。神代巻
等の文義に疎し。仰ぬなれど宣初日本書紀を撰ばれしを一品
舎人親王勅を奉て太安麿佐伯富士麿以下五人の儒者に命じ
て成たるすなが神史考にしるせる諸文のこと。弘仁より康保にいたる
まで七ヶ度禁中にて是を講ぜしも。紀侍明経の博士の任にて別に神
道云又は祢宜神主の出く講じたる書にはあらず。神学といふす
むしよりあらず。紀侍明経。明法。算道の四道の儒の和に神学の
博士あるべきすなれた。今まも国史にも見へざるは文字を漢史に撰

して書たるものなり。文字にうる学者より講じ来れり。然るに日本書紀
神代巻。禮法を儒書を以ぶり。奇妙なるすは仏書を假てうされり。太古
のすゆて識べしぶ。老子ひとは侍りを儒書仏書にて潤飾したる書
なれど。其潤飾せし書の出處。是は漢書某本紀の文。是は法華経
某品の文といふすを分。其文を省其実を取るすを。神史をよむの
秘史なるべし。白井氏神社啓蒙の凡例に。神代巻に於て取べきと
唯二三策而已と書れしを。凡解ありと見へたり。其潤飾は其質実
に於るの糟粕なり。其実を撰考而時は神古の大旨著るべきに奇
を説明をのべて人を懷んとしたる。実を含て糟粕にのこうる。也
諺に糟祢宜といへるもうるすよりまや。忌部が弱肩に太祥をうけ

とてもあるに其職なるゝ人祥を安肩にけ是を鑑て神なへ向ふを
礼と心得神に向て祓をよむ類仏法を置たるゝ仏家の所作に
おちて木綿祥を悔誓愛に比それ祓を梵経に比しくなるゝ
恵鳥の流に國史格式の本據を引く其誤謬をしらせ先へのもの
主と為て日用人の行ふ大道の外に別に道あると云ひて意必固我
の醜塊中に沒る也ゝ是ゝ愚まれく恵にして下恵にうつしまの古經
むべなるかな如是のるまの漢学者のあるに神及を蔑如せる不亦難也乎

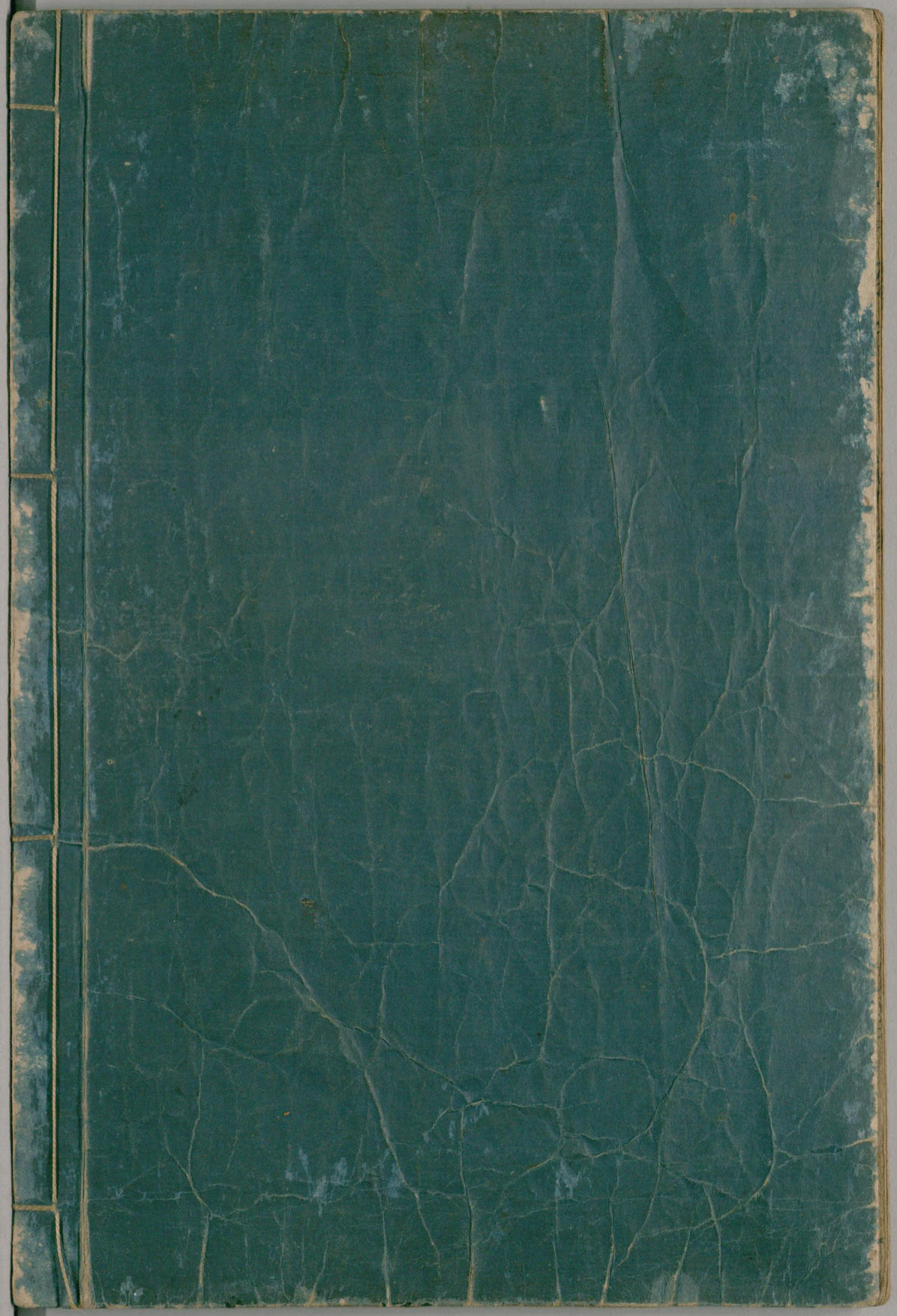
南嶺子巻之一終

岩久

此書能く味ひ読むべし

生々堂門学校書

国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『南嶺子 : 4巻』 請求記号 049.1-Ta131n

ガラス使用